尾崎一雄全集

第十四卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第十四卷
昭和六十年三月三十日初版第一刷發行

著者　尾崎一雄
發行者　布川角左衞門
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番號　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(營業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所
落丁・亂丁本はお取替致します

© K. OZAKI　Printed in Japan　0395—71214—4604

目

次

あの日この日 下

百三……五
志賀直哉に勝てることはないか　辻潤の一喝「君は悪人だ！」辻の尺八の音色
百四――百七……一〇
奇人渡邊脱哉　畸人兵本善矩　保田與重郎の兵本論に不服
百八……三九
池田小菊作「小説の神様」
百九……四七
奈良を追放される（昭和五年）
百十……五三
志賀直哉をめぐる「高畑連」　阪中正夫の叫び「志賀直哉は人を殺す」
百十一……五八
加納鐵哉の息和弘との交遊　S女と別れる　我本來無一物
百十二――百十四……六四
奈良への取材旅行（四十七年六月）　兵本善矩は生きてゐるか　志賀直哉に食はれた者食はれなかつた者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

百十五 ― 百十六 ……八三
北村信昭、つひに兵本の死をつき留める（昭和四十七年） 志賀直哉、奈良を去る（昭和十三年三月）
百十七 ……一一〇
井の頭に山崎剛平を襲ふ 牛込區役所臨時雇となる（昭和六年）
百十八 ……一一〇
尾崎士郎との邂逅 志賀直哉より西鶴現代語譯の仕事を與へらる 富士見町の宿を夜逃げ、馬場下の東光館にもぐり込む 古本屋大觀堂をいぢめる（昭和六年）
百十九 ― 百二十 ……一一一
早大學生白井弘との交遊 白井家で山原松枝に逢ふ やがて結婚の決意 西鶴の現代語譯にとりかかる 初稿不出來、小林多喜二を引合ひに出し志賀直哉より叱責さる 肝に銘ず（昭和六年）
百二十一 ……一一四
松枝の姉山原鶴の許しを得て正式に松枝と結婚 白井弘夫妻の家出 西鶴の現代語譯成る（昭和七年）
百二十二 ― 百二十三 ……一六三
『文學黨員』創刊 藝術派のあがき（昭和六年）

志賀直哉・尾崎一雄共著『現代語西鶴全集』第四卷發行　山口剛逝く　その告別式の翌日、長女生る　丹羽文雄、四日市より家出上京、丹羽、淺見らと同人雜誌『小說』發行のもくろみ（昭和七年）

百二十四……一七六

志賀直哉の「リズム」論、ならびに網野菊への書簡（昭和六年）　わが推理力

百二十五……一八四

小林多喜二の奈良行の時期はつきりする　右につき平野謙とのやりとり（昭和四十七年）

百二十六……一八九

東光館横田夫妻

百二十七――百三十一……一九六

「志賀直哉氏の文學縱横談」（『文學案內』昭和十年十一月號）　志賀直哉の勘違ひか貴司山治の聞き損ひか　以下數章、小林多喜二の志賀直哉訪問時期にしつこくこだはつて、多くの評論家、作家たちの淸閑をみだす

百三十二……二三九

「山川草木轉荒涼」　田畑修一郎久々の來訪　金田產院から諏訪神社脇の小屋へ　木枯や一本の道はるかにて　『小說』創刊の企て進む（昭和七年）

百三十三……二五〇
映畫「赤西蠣太」に「脱帽……」の號令　誤植の怖さ
百三十四―百三十五……二五六
諏訪ノ森の家　木枯や母乳張りてゐる幼な妻　長篇「河」に取りかかる『小説』發刊　淺見の秀作「コップ酒」　小林多喜二の死　人非人宣言　危ない橋
百三十六―百三十八……二七七
岡澤秀虎の死　横丁めぐり（昭和四十八年）　田畑修一郎のこと　純文學派新人群の窮狀　居直り（昭和七―八年）
百三十九―百四十一……三〇一
淺見淵死す（昭和四十八年）
百四十二……三二五
檀一雄との初對面　檀の「此家の性格」
百四十三……三三二
上落合への可笑しな轉居　向ひに上野壯夫、小坂たき子が越して來た　なめくぢ横丁に足繁く出入りした人々　山岸外史、太宰治、森敦、澤西健、立原道造、淺見淵、丹羽文雄、田畑修一郎、中谷孝雄、外村繁、古木鐵太郎、中島直人、木山捷平、

光田文雄、古谷綱武、堀田昇一、細野孝二郎、本庄陸男、平林彪吾、小熊秀雄、龜井勝一郎、保田與重郎、加藤悅郎、吉原義彦、綠川貢、神近市子、矢田津世子、横田文子、若林つや子、平林英子、林芙美子、その他（昭和八、九年）

百四十四……三三九
丹羽文雄續々と力作發表　なめくぢ横丁の裏の長屋には水野成夫ら十數人の共產黨員が潛んでゐた

百四十五……三四五
「木山捷平日記」再起第一作「暢氣眼鏡」『人物評論』に載る「暢氣眼鏡」を尾崎士郎激賞　淺見、田畑の激勵

百四十六―百四十七……三五六
『行動』、『文藝』、『文藝首都』、『世紀』、季刊誌『鶴』、第三次『早稻田文學』、『青い花』、『日本浪曼派』、『木靴』等續々發刊　室戸颱風を衝いて下落合へ引越す（昭和八、九、十年）

百四十八……三七二
泰山鳴動『青い花』一册　但し、太宰、檀の小說佳し（昭和九年）

百四十九……三八〇
丹羽文雄第一小說集『鮎』出版　その祝ひの集ま

りの夜、長男出生、鮎雄と名付く　辻山義光・春子夫妻の好意（昭和十年）

百五十……三八七

片岡鐵兵、林芙美子の家近し　芙美子と長女一枝とのつき合ひ

百五十一――百五十二……三九三

第三次『早稲田文學』編集事務に專念　同人雜誌評に力を入れ、新人を物色す　谷崎精二主幹の反對で太宰治の原稿を採りそこなふ（昭和九―十二年）

百五十三……四〇九

山崎剛平、淺見淵を相談相手に砂子屋書房創業　最初の本、外村繁『鵜の物語』切取りの厄に逢ふ　この本の出版記念會の夜、醉つて大言壯語、四谷署に留置さる　この日二月二十日は志賀直哉生誕の日小林多喜二死亡の日に當る、何をか言はん

百五十四……四一五

二・二六事件起る　谷崎精二と共に、料亭「幸樂」門前にて反亂軍の演說を聽く　砂子屋、「第一小說集叢書」を出し次ぐ　仲町貞子『梅の花』、太宰治『晩年』、和田傳『平野の人々』（昭和十一年）

百五十五――百五十六……四二四

四月、早稲田文學社を辭し、砂子屋相談役となる、

即ち淺見と職場交替なり　同月『暢氣眼鏡』刊行
意外に賣行良し（昭和十二年）　中島直人の悲喜
劇的ハワイ行　志賀直哉より短篇集『萬曆赤繪』
を贈られ感激す（昭和十一年）　村田春海死す

百五十七―百五十八……四四四

七月、『暢氣眼鏡』第五回芥川龍之介賞受賞、こ
との意外に驚く　この受賞を、山崎剛平は一週間
も知らず　賞金だけ早く呉れ、と文藝春秋社に催
促　九月上野櫻木町へ轉居　砂子屋の出版活動に
はかに活氣を帶び來たる（昭和十二年）

百五十九……四六五

內務省警保局檢閲課とのいざこざ　片上伸全集刊
行の經緯と岡澤秀虎への憤懣　『文學者』創刊
水野成夫と初めて逢ふ　『文藝日本』創刊　文藝
統制强化さる、その諸相

百六十……四七八

短篇「猩々」特高に狙はる　「海軍省派遣前線慰
問團」に、「海の會」代表として加はり、長谷川
時雨、圓地文子らと南支、海南島方面へ四十日の
旅（昭和十六年）

百六十一……四九四

青柳優との交遊　敗戰主義者青柳との喧嘩　青野
季吉の韜晦味

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

百六十二……五〇七
「文壇新體制」と文士の苦澁　「日本文學者會」での我が暴言　武田麟太郎とのやり合ひ
百六十三……五一七
淺見淵の「尾崎一雄論」　日米開戰の日の昂奮　戰勝を大いに喜ぶ　『文藝日本』と氣が合はず
百六十四……五三二
戰艦陸奥の爆沈を即日知る　公表まで他にもらさぬ苦痛　殉職せる陸奥砲術長夫人は松枝の女學校級友　岩手縣山田港の一青年は、この年十月すでに事件を知つてゐた　山田驛で豐田副武海軍大將（横須賀鎭守府司令長官）を見る（昭和十八年）
百六十五……五五〇
健康衰ふ　妹エイ結婚　一月末志賀直哉訪問、今生の別れか、と思ひ沈む　郷里に歸つて靜養、その間、戰爭を無視せる短篇「田舍がたり」を書き、『文藝春秋』八月號に發表　青柳優胃潰瘍にて入院　これを見舞つて二十日後、青柳死去　さらに一ヶ月後、松枝の留守中吐血して仆る（昭和十九年）
百六十六……五六〇
青柳優追想　丹羽文雄見舞に來る　山崎剛平も來る　安靜一ヶ月ののち、郷里なる現住所に歸り、

死生を故園山河にゆだぬ（昭和十九年）
「あの日この日」を終つて……五七二
あとがき……五七四
文庫本刊行に際して……五七六
後　記……五七七

尾崎一雄全集　第十四巻

あの日この日 下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com